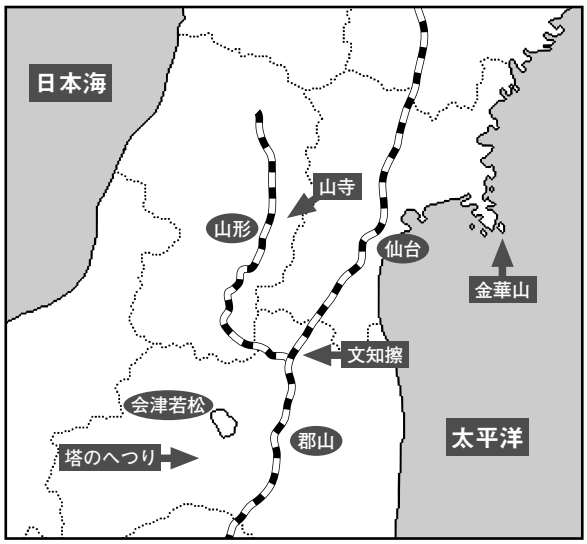
地質ニュース597号，60－67頁，2004年5月
Chishitsu News no.597, p.60－67, May, 2004

石の俗称

みちのく石便り（その2）

加　藤　碩　一[1)]

みちのくも平成15年5月26日夕刻に地震があり，筆者はちょうどその時青森にいました．なかなか連絡がつかずやきもきしました．さらに，7月26日にも震度6の揺れが3回もあるありさまです．幸い東北センターは被害が極めて軽微でした．このときは東京におりました．どういうわけか筆者が仙台にいないときに地震があるのです．2度あることは3度となりますか．しかし，2003年は宮城県沖地震25周年，関東大地震80周年，日本海中部地震20周年の節目を迎え，次の宮城県沖地震の20年以内の発生確率は90％以上という状況にあります．地震そのものの発生は避けがたいことですが，被害を最小限にするべき対策に怠りがないようにしたいものです．もっとも，個人的には最善の対策は日々悔いなく生きること（秘蔵の酒などというものはさっさと飲んで始末するもの）だと思っています．そんなわけで（どういうわけですか），ほろ酔い加減で石の便りを続けましょう．御用とお急ぎでない方はしばしお付き合いのほどを．



第1図　位置図．

1．黄金花咲く金華山（宮城県）

「金華山」という地名は，筆者幼少の砌，社会科の教科書で「親潮（寒流）と黒潮（暖流）の会合する「潮目」がこの島の東方沖合いにあり，世界屈指の好漁場となっている」という記述を見てから一度は訪れたいと思いつつ半世紀近くを閲してしまいましたが，ついに先日訪れることができました．「金華山」は島の名前であり，同時に中央部の高所をなす標高449.5mの山の名前でもあります．牡鹿半島の東方約1kmの太平洋上に位置し，東西約4km，南北5kmで周囲約26km，面積約9km^{2}の小島です．奈良時代の代表的歌人の一人である大伴家持（718?-785）の歌「すめろぎの　御代栄えんと　東なる　みちのく山に　黄金花咲く」（万葉集）は「金華山」を詠んだものといいます．事実，天平勝宝元年（749）陸奥国では日本初の金の産出があり，当時大仏建立中の朝廷に献納されたそうです．出羽三山（山形県）・恐山（青森県）とともに東奥三霊場として，明治期以前は女人禁制でした．麓にある黄金山神社は，天平勝宝の頃の創建で約1,200年の歴史を有し，金山昆古神（かなやまひこのかみ）と金山昆姫神（かなやまひめのかみ）を祭る延喜式内社です．古くから金を始め金属総体を保護する神さまですが，度重なる火災で焼け失せ，現在の堂宇は明治期以降のものです．三年続けてお参りすると一生お金に困らないそうです．信ずるものは救われます．さて，芭蕉が「奥の細道」の途次，平泉を目指すときに道を間違えて石巻に来て「こがね花咲くとよみて奉りたる金花山（金華山のこと）

1）産総研 東北センター

キーワード：亀石，天柱石，千畳敷，鷲塔巌，鷹塔巌，象塔巌，文知摺石，人肌石，夜泣石，百丈岩，神楽岩，蛙岩，対面石

写真1　「亀石」（宮城県金華山）.

海上に見渡し」とあるのはよく言えば創作，悪く言えば嘘というべきです．地図をみれば明らかなように，石巻からは牡鹿半島を隔てて東側の金華山を直接見ることはできないからです．あるいは，道を間違えたくらいですから半島西岸の田代島か網地島を見間違えたのでしょうか．

島全体は，花崗岩質岩で中生代前期白亜紀の金華山花崗岩類に属します．もう少し詳しく見ると，島の西部は主に中粒片状黒雲母角閃石石英閃緑岩で，主部～東部は，中粒黒雲母～角閃石黒雲母花崗閃緑岩からなります．港は島の西岸にあり，そこには写真1にあるような「亀石」が海上に現れています．写真があまりうまくありませんが，亀の前肢がよくできていて，明らかに海亀の形状をなしています．亀石（岩）についてはすでに本欄で，「亀と石」（加藤・遠藤，2001）として紹介していますのでご参照ください．この石は，前述のように石英閃緑岩です．

金華山山頂には奥の院に相当する大海祇神社（おおわだつみじんじゃ）があり，海上の守護神としてあがめられています．この山頂部から，東へ15分くらい下ったところに「天柱石」というのがあります（写真2）．文字通り天を突くような巨大な20-30mほどの高さの柱状の岩塊で，前述した花崗閃緑岩からなっています．この岩塊は，本来もっと高かったそうですが，何らかの原因（地震？）で先端が折れてしまったとのことです．さらに，急な道を下っていくと1時間ほどで東海岸に到達します．そこの海岸部が「千畳敷」と称される名所です（写真3）．様々な岩種，様々な成因の「千畳敷」が日本各地にたくさんあり，ここでは紹介しきれないのでまたの機会としましょう．ここの「千畳敷」は，「天柱石」と同様の花崗閃緑岩の海食地形で，写真3に見られるように比較的節理が発達しています．松の緑に映え，波が豪快に打ち寄せる白い岩畳はみごとなもので，あまり人がこないせいでゴミもなく心が癒される情景です．しかし，ということは，行きはヨイヨイ，帰りは怖いの通り大変しんどいものでした．二度と行く気は起こりません．

写真2　「天柱石」（宮城県金華山）.

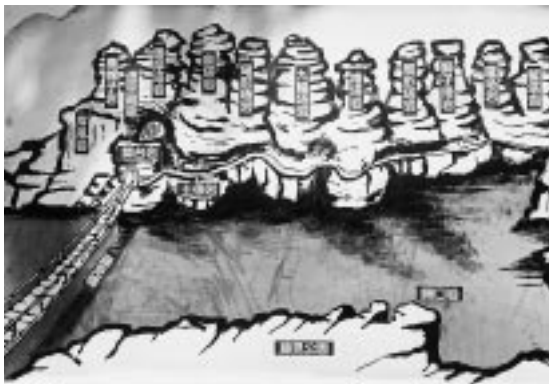
写真3　「千畳敷」（宮城県金華山）.

2. 奇勝「塔のへつり」（福島県）の奇岩

今度は，少し内陸に入ってみましょう．会津鉄道「塔のへつり」駅で下車して，福島県会津郡下郷町白岩付近の大川沿いの渓谷に歩いていくと，駅名どおりの「塔のへつり」という奇妙な名前の名勝地

写真4　塔のへつり層(福島県).

写真5　「鷲塔巌」(右側)と「鷹塔巌」(左側).



第2図　塔のへつり地域の奇岩(福島県).

写真6　「象塔巌」.

があります.「へつり」とは,「険しい山道」の意味だそうです. 江戸時代に編纂された「新編会津風土記」には「断崖数丈流れに臨て聳ひ其腰僅に一歩を通ず, 棚桟を架すること三所険難云計なし」(新字体に変換)と記述されています. 周囲の地質は, 陥没カルデラを充填した各種凝灰岩類や凝灰質堆積岩(礫・砂・シルトなど)などの後カルデラ期湖成堆積物(写真4)が浸食の程度の差から塔状をなして林立しています. 従来は新第三紀鮮新世といわれましたが, 最近の研究(山元, 1999)によれば, 第四紀前期更新世とみなされるようになりました. ここの数多くの岩塊や侵食地形に次のような俗称が付されています(第2図).

「鷲塔巌」は, 9層の塔の最上部が鷲の頭部に似ていることからの命名だといいます. これに対して「鷹塔巌」は, 巌上に鷹が巣をつくり毎年雛を孵していたことから名づけられたものです(写真5). 石の俗称の命名法には, 幾通りかありますが, その1つが後者のように石・岩に何か動物が棲んでいたことに因んで付けられるものがあります. 大蛇が棲んでいたから「蛇岩」, 猿の群れがいたので「猿岩」というたぐいです. もちろん, 石の性質や形状にはまったく関係ありません. 人の名前もその性状や容姿には関係なく,「美子」は必ずしも美人ではなく,「小百合」が必ずしも清楚な女性をあらわしている

写真7　「塔のへつり」遠景．

写真8　「文知摺石」（福島県）．

わけではありません．それでは，筆者の連れ合いの名前は何だと問う読者もいるかもしれませんが，本文に関係ないので伏せておきましょう．閑話休題．さて，「獅子塔巌」は，獅子の顔に似ていること，「屋形塔巌」は，家屋に形状が似ていること，「櫓塔巌」は櫓との類似，「九輪塔巌」は梵塔の九輪に似ていることからです．「象塔巌」は，写真6にあるように象の鼻のように見えることから名付けられました．「護摩堂巌」は堂宇との類似，「舞台巌」は，虚空蔵堂の前にあり，頂部が平坦で数十人を乗せられるほどの広さを持つことからの命名．「屏風巌」は石壁が屈曲するさまを屏風に見立てたもの，「烏帽子石」は烏帽子との類似．「夫婦石」は2つの立石を夫婦にみなしたもの，「陰陽石」は，男女の性器になぞらえたものなどが有名ですが，現在一部は崩落して不分明となっています．きりがないのでこれらの遠景を示すにとどめます（写真7）．

3. 悲恋（今は死語）を忍ぶ「文知摺（もちずり）石」（福島県）

福島県福島市山口字文知摺（JR福島駅からバスで30分ほどです）には，福島市指定の史跡名称である「文知摺観音」があり，この境内に古来有名な歌枕に因んだ石があります．それが「文知摺石」です（写真8）．「もちずり」の名は，かつてこの地の特産物であった「もちずり絹」に由来するそうです．「しのぶもじずり」「しのぶずり」というのは，忍ぶ草（ウラボシ科のシダの一種）の茎と葉をすりつけねじれたような模様を出したものです．これの綾形を組み合わせた模様の絹地だそうです．また，「文知摺石」の表面に忍ぶ草の模様があり，そこに藍をすりつけ絹織物を染めたともいいます．いずれにしても奥州藤原氏二代目の基衡が京都の仏師雲慶に送ったという記録もあり，当時京の都では大変な評判で，公家の狩衣などに愛用されたそうです．岩質は粗粒の花崗岩質岩で，巨礫の平坦な面は，おそらく節理面でしょう．周辺に分布するのは中生代後期白亜紀の霊山複合花崗岩類に属する片状黒雲母角閃石花崗閃緑岩なので，この石もそれに由来するものでしょう．もちろん，現在では模様が見えるわけはありません．侵食に抗する程度が違う鉱物の分布，とくに比較的目立つ黒雲母の分布形状を忍ぶ草の模様になぞらえたのでしょう．

さて，この石にまつわる伝説は次のようなものです．9世紀半ばの平安時代前期の貞観年中に，陸奥国（青森県と秋田県の一部）と出羽（秋田県と山形県）二カ国の按察使に任ぜられ京都からみちのくへ下ったのが，嵯峨天皇の皇子で臣籍に下って源姓を賜った公卿の源融（みなもとのとおる）でした．按察使は，本来地方行政の監督役で，任地の隅々を巡回するのです．あるとき公務と離れ世に名高い「文知摺」を見にお忍びで信夫郡へやってきたところが道に迷い，おりよく通りかかった村の長者に招かれその家に行き，娘である虎女に会い，互いに相思相愛の仲となったそうです．やがて，源融は，再会を固く約して都に戻り虎女は文知摺観音に百日参りの願をかけ再会を待ちわびていました．満願の日にふと見ると（他の説では，99日目）「文知摺石」の表面に源融の面影が浮かびました．これにより別名「鏡石」ともいわれます．しかし，一瞬で像はかき失せてしまいあまりのショックで彼女は病の床に伏せってしまいました．そんな折，使い

写真9　源融（右）と虎女（左）の墓．

写真10　「人肌石」（福島県）．

の手で「みちのくの　忍ぶもちずり　誰ゆえに　みだれ染めにし　我ならなくに」という歌がもたらされたのです．この歌は，なかなかの恋の秀歌で古今和歌集にも載りましたし，明治8（1875）年に建立された「河原左大臣歌碑」にも刻まれています．その後，虎女は儚くなってしまいましたが，昭和58（1983）年に有志によって二人の墓と称されるものが立てられました（写真9）．33年に一度開扉される観音の奉修にあたり，京都嵯峨の清涼寺から公の分骨を迎え，虎女の墓もここに移し法要したのです．千百余年を経てはじめて二人の思いが結ばれたというわけです．後年，松尾芭蕉もこの地を訪れ，「奥の細道」に「早苗とる　手もとや昔　しのぶ摺」という句を載せています．寛政六（1794）年，ここを訪れた京都の俳人丈左房が芭蕉追恩句会を開催したおり，彼の筆による芭蕉句碑を建立しています．さて，「奥の細道」によると，昔はこの石は山上にあったが，麦の葉で，この石をこすると自分の思う人の面影が映るという俗説（「鏡石」伝説）が流布し，訪ねてくる人が畑の麦を荒らすので，付近の百姓が怒って石を谷に突き落としたため，源融の面影が浮かんだ石の面が下になってしまい，さらになかば土に埋もれてしまいました．現在でも自然愛好派とか称する輩が四輪駆動車やバイクで，川原や獣道まで乗り入れて自然を荒らすのに似ています．富士山が世界遺産に登録されなかったのも登山者のもたらすごみや糞尿の処理が不十分なためでした．人が行かないことが，最善の自然保護だと嫌味のひとつもいいたくなります（おまえのいうことは全部嫌味だなどと嫌味をいわないでください）．さて，話を戻してみると，正岡子規も明治26

写真11　「夜泣石」（福島県）．

（1893）年に当地を訪問し，「涼しさの　昔をかたれ忍ぶずり」という句を残しています．境内にある句碑は，昭和15（1940）年に建立されたものです．

また，境内には，ほかにも次に紹介するようないくつかの石があります．

「文知摺石」を囲む石柵の内側に，そのかたわらに「綾形石」というのがあります．扁平な長方体状岩塊が伏せられたように置かれています．前述したように「もちずり絹」の模様に因んだものでしょうが詳細は不明です．岩質は，「文知摺石」と同じです．

「人肌石」という岩塊があります（写真10）．そばの立て札の記述によれば「この石は雨にぬれても早くかわき　雪もあまりつもらないので人の肌のやうにぬくもりのある石といわれ「人肌石」と名づけれられました」ということです．本当なら，冷え性の人は助かりますが，岩質は，「文知摺石」とまったく同じで，野暮を承知で言えば，この石だけが特別な速乾性をもっているわけもありません．傍らの碑に画家として名高い小川芋銭（うせん）の「若緑

志のふの丘に　上がり見れば　人肌石は　雨にぬれるつ」という歌が刻まれています．これは昭和23（1948）年建立され，当時の日赤病院院長の池田龍一氏の筆になるものだそうです．

さらに，「夜泣石」という大きな岩塊があります（写真11）．これも「文知摺石」と同じ岩質です．「夜泣石」というのは，各地にあり，稿を改めてご紹介したいと思いますが，最も有名なのは静岡県の「小夜の中山の夜泣石」でしょう．残念ながら，ここの「夜泣石」のいわれはわかりませんでした．

4. 山形へ行けば誰でも訪れる？　観光スポット「立石寺」（山形県）

山形市北東方に位置し，JR仙山線山寺駅からほど近い東北屈指の霊場の1つである宝珠山立石寺は，貞観二（860）年に最澄（伝教大師）の弟子である慈覚大師円仁が唐に10年滞在した後，帰朝して開山された比叡山延暦寺の別院（天台宗）で「山寺」とも俗称されます．松尾芭蕉が，「奥の細道」の途次立ち寄り「閑かさや　岩にしみ入る　蝉の声」の句を詠んだことで有名です．「山寺史跡名勝案内図」（第3図）に示されているように侵食地形として多くの奇岩奇勝があります．芭蕉は「岩に巌を重ねて山とし，松柏年旧り土石老いて，苔滑らかに」と記述しています（写真12）．このあたりは，地質学的には，新生代新第三紀上部中新世の山寺層で，厚さ350m以上ものデイサイト（石英安山岩）火砕岩のカルデラ堆積物です．珪長質軽石凝灰岩を主とし赤紫色を帯びたデイサイト溶結凝灰岩やシルト岩などからなる湖成堆積物を伴います．いくつか奇岩を紹介しましょう．

「百丈岩」は，仁王門の裏手にある大きな露岩部で，節理の発達した凝灰岩塊です．岩塊上部には，慈覚大師の遺骸を納める入定窟があり，岩上には，納経堂，五大堂や開山堂があり，その基盤をなして

写真12　立石寺（山寺）と周囲の奇岩遠景（山形県）．

第3図　山寺史跡名勝案内図（山寺入場券裏面）．

写真13　「百丈岩」（山形県）．

写真14　「神楽岩」(山形県).

写真15　「蛙岩」(山形県).

います(写真13).「神楽岩」は，神を祭るための舞楽である神楽を奏する舞台になぞらえた上面が比較的なだらかな巨大な凝灰岩塊で，侵食に弱い部分が穴や凹所を作っています(写真14).「蛙岩」(写真15)は，あたかも右横向きの蛙の座った姿に見紛える大きな凝灰岩塊です.「蛙岩」の前にある銅像は，釈迦の弟子でいわゆる十六羅漢の一人でもある那伽犀那尊者(なかさいなそんじゃ)です．知恵をさずけ長生きをさせる法水を与えてくださるそうです．なぜここに像があるのかわかりませんが，水と蛙というのは何か関係ありそうですがね．境内西側上部に位置する巨岩というか大露頭は,「天華岩」と呼ばれていますが，別名「天狗岩」とも称されます(写真16).現在ではこの岩に登ることは禁じられています．この他にも，姥堂前の「笠岩」(慈覚大師が登山の際,

写真16　「天華岩(天狗岩)」(山形県).

写真17　「対面石」(山形県).

この岩陰で雨宿りしたことに由来),「せみ塚」の先にある「弥陀洞」(阿弥陀如来に似た岩塊で「丈六(1丈6尺＝約4.8m)の阿弥陀如来」とも呼ばれます)など色々あります.

さて，山寺と道路を隔てて向かい側に位置するのが「対面石」です(写真17)．このいわれは次のようなものです．慈覚大師が開山するにあたり，このあたりを支配していた狩人(マタギ)の磐司(磐次)磐三郎兄弟とこの巨石上で対面し，仏の道を広めるべき根拠地をここに作る旨と殺生を禁ずる旨を了承させたといいます．マタギの祖先とされる磐司磐三郎兄弟は彼らの父である猿丸と協力して，日光二荒山(栃木県)と上州赤木山(群馬県)の山神が領地争いをしたおり，赤城明神の化身である大ムカデの目を弓矢で射抜いて，苦戦していた二荒の神を助けたといわれます．その功により兄弟は日本全国の山谷で狩をする特権を与えられました．さて，平安時代初期は山岳仏教の黎明期で，高野山金剛峰寺や比叡山延暦寺の高僧たちは日本

写真18　「馬口岩」（山形県）.

中の深山幽谷に分け入り仏教を広めましたが，円仁もその一人だったわけです．彼の教化により磐司磐三郎兄弟は，仏道に帰依し，生業である猟師をやめ開山に協力したということです．これを喜んだ動物たち，特に猪たちが喜びあい群れをなして円仁に感謝したそうです（見たわけではありませんが，どんな様子だったのでしょうかね）．円仁は，磐司磐三郎兄弟に礼を言うべきだと猪たちを教導し，これを契機に毎年猪たちは兄弟を祭った祠の前で喜びと感謝の舞いを踊ったといいます．このシシ踊り（鹿子舞）が，毎年夏に山寺磐司祭で奉納されます（言うまでもなく人が踊るのですよ）．また，この石に左手をあてて願いをこめれば良いことに対面できるともいわれています．お試しを．

山寺南方の山々も同様な凝灰岩からなり，風食によって様々な穴が開き，侵食による岩塊とあいまって独特な情景を呈しています．その1つが「馬口岩」で，大きな風化穴が馬の口のように見えることから命名されました（写真18）．冬季には，周辺に巨大な氷柱（ツララ）が形成され，「アイスヒル」とも通称されているそうです．

それでは，また．

参　考　文　献

加藤碩一・遠藤祐二（1999）：石の俗称辞典．愛智出版，312p.
加藤碩一・遠藤祐二（2001）：亀と石．地質ニュース，no.563，61-69.
山元孝弘（1999）：田島地域の地質．地域地質研究報告（5万分の1地質図幅）地質調査所，85p.

KATO Hirokazu（2004）：Popular named stones/rocks in Tohoku District, Northeast Japan.

＜受付：2003年12月24日＞